

2022年12月22日

環境大臣
西村 明宏様

公益財団法人どうぶつ基金
理事長 佐上邦久

要請書

1,

12月16日奄美希少野生生物保護増殖検討会での同省奄美群島国立公園管理事務所の阿部慎太郎所長の発言の訂正と謝罪を要請します。

奄美大島におけるアマミノクロウサギの推定生息数とノネコの捕獲数（いずれも環境省発表データ）から「野生化したノネコの捕獲」と「アマミノクロウサギの指定生息数の増減」との関係性は認められないのは明らかです。（※資料1，資料2 参照）

つきましては

「マングースの駆除に加え、森林の回復や捨て猫などが野生化したノネコの捕獲が進んだ効果も大きい」という発言を

「マングースの駆除に加え、森林の回復が進んだ効果も大きい。ノネコの捕獲の効果は認められなかった。」

に訂正するとともに、国民に対して謝罪を要請します。

2,

「野生化したノネコの捕獲」と「アマミノクロウサギの指定生息数の増減」との関係性は認められないことを明証するデータ（※資料1）をメディアに公表し「ノネコの捕獲の効果は認められなかった。」ことを認めて発表してください。

3,

上記「ノネコの捕獲の効果は認められなかった。」の理由により「奄美大島における生態系保全のためのノネコ管理計画」を即刻、中止してください。

4, 本要請に対する回答を2023年1月15日までに下記あてEメールにていただきますようお願いいたします。

Email : contact@doubutukikin.or.jp

公益財団法人どうぶつ基金
理事長 佐上邦久（さがみくにひさ）

以上

※資料1 奄美大島におけるアマミノクロウサギの推定生息数とノネコの捕獲数

A, ノネコの捕獲がわずか13頭しか行われなかった2003-2015年の間にクロウサギは8倍に増えた。

B, ノネコの捕獲が151頭行われた2015-2020の間にクロウサギは14%減少した。

○奄美大島におけるアマミノクロウサギの推定生息数（環境省データより）

2003年時点	2000~4800匹
2015年時点	16580~39780匹
2021年時点	10000~34000匹

○奄美におけるノネコの捕獲数

2012年	7頭（環境省 ノネコ捕獲モデル事業）
2013年	6頭（環境省 ノネコ捕獲モデル事業）

2018年から2020年11月まで 151頭

（環境省 県、島内5市町村「奄美大島における生態系保全のためのノネコ管理計画」）

資料2

朝日新聞デジタル記事 2022年12月17日と同記事に対する太田匡彦さん

（朝日新聞記者=ペット、動物）のコメントプラス記事

朝日新聞デジタル記事

奄美通信員・神田和明 2022年12月17日 11時00分

アマミノクロウサギ、大幅に増加 マングース駆除の成果か

国の特別天然記念物で絶滅のおそれのあるアマミノクロウサギについて、環境省は16日、2021年時点の推定個体数を約1万1500~約3万9千匹と発表した。前回推定した03年時点より大幅に増えており、捕食者のマングースやノネコの捕獲が進んだためとみられる。

アマミノクロウサギは鹿児島県の奄美大島と徳之島だけに生息する。原始的なウサギの姿を残している種で、「生きた化石」とも呼ばれる。昨年、世界自然遺産に登録された両島の森を代表する生き物だ。

環境省が16日、同県奄美市で開いた専門家の検討会で21年の推定個体数を公表。奄美大島は約1万～約3万4千匹、徳之島は約1500～約4700匹だった。糞(ふん)を数えたり、動画から生息密度を算出したりして推定した。

03年は奄美大島で約2千～約4800匹、徳之島で約100～約200匹だった。大幅に増えた要因の一つに、クロウサギを捕食する外来種マンガースの駆除が進んだことがある。

環境省は1993年から駆除を始め、奄美大島では18年4月を最後に捕獲ゼロが続いている。これまでに3万2千匹以上を捕獲しており、早ければ23年度にも「根絶宣言」を出す見通しだ。

アマミノクロウサギは同省のレッドリストで絶滅危惧ⅠB(近い将来に絶滅の危険性が高い種)に分類されている。検討会は、24年度までに絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が増大している種)以下にすることを目標にする。推定個体数の増加は、分類を見直す際の検討材料になるという。

同省奄美群島国立公園管理事務所の阿部慎太郎所長は「マンガースの駆除に加え、森林の回復や、捨て猫などが野生化したノネコの捕獲が進んだ効果も大きい」と話す。数が増えてもモニタリングは継続していく、としている。(奄美通信員・神田和明)

コメントプラス

太田匡彦

(朝日新聞記者=ペット、動物)

2022年12月21日10時44分投稿

【視点】

環境省によるアマミノクロウサギの推定生息数が大きく増加している件については、2019年3月25日に弊紙夕刊及び朝日新聞デジタル(<https://digital.asahi.com/articles/ASM2M67FTM2MUTFL016.html>)で報じている。

朝日新聞が環境省に情報公開請求をして入手した「平成28年度奄美希少野生生物保護増殖検討会」(2017年2月18日開催)の資料などをもとに記事を書いた。同資料によると環境省は、2015年時点の奄美大島におけるアマミノクロウサギの推定生息数を1万6580～3万9780匹と算出していた。

奄美大島内で発見したふんの量などから推定する従来と同じ方法で算出したデータに、森林内に最大564台設置したカメラの9年分の撮影データなどを加味して算出したものだ。

環境省は従来、奄美大島におけるアマミノクロウサギの推定生息数を、2003年時点のデータが最新で2千~4800匹としてきたから、10年あまりでおよそ8倍に増えていたことになる。

この値について、環境省那覇自然環境事務所に取材した際のコメントも、そのまま引用しておく。「推定方法は適切だと考えているが、まだ数字にばらつきが大きく、専門家からは『過大評価している可能性がある』などの指摘があった。ただ、アマミノクロウサギが増加傾向にあるのは間違いなく、二つの手法ではいずれも下限値が1万~2万匹と出ており、より精査が必要だが、この数字は現場感覚からも現実的だ」(岩浅有記・野生生物課長)

そのうで今回の記事を読むと、なんとも不可解な気持ちになる。環境省が今年12月16日に公表したデータによると、2021年時点で、奄美大島におけるアマミノクロウサギの推定生息数は約1万~約3万4千匹になるという。2015年時点の推定が「過大評価」だったとしても、この6年間、推定生息数はほぼ横ばいだったということになる。それなのに記事には、同省奄美群島国立公園管理事務所の阿部慎太郎所長は「マングースの駆除に加え、森林の回復や、捨て猫などが野生化したノネコの捕獲が進んだ効果も大きい」と話した、とある。

1979年に奄美大島に導入されたとされるマングースの駆除は、10年あまりでおよそ8倍に増えていることがわかった2015年時点でも、アマミノクロウサギ増加の大きな要因と見られていた。やはり情報公開請求によって入手した「平成28年度奄美希少野生生物保護増殖検討会」の議事録では、検討委員らが「マングースの削減された防除事業の成果が出(て)来ているのではと思います」「マングースをしっかりと防除して(中略)回復しているのです」などと発言している。

一方で環境省が「捨て猫などが野生化したノネコ」の捕獲に本格的に乗り出したのは「奄美大島における生態系保全のためのノネコ管理計画」を公表した2018年からだ。同年度から10年計画で「ノネコ」の捕獲を始め、2021年度時点では4年目まで計画が進んでいたことになる。それなのに、アマミノクロウサギの推定生息数は2015年時点からほぼ横ばい……。

環境省のデータをそのまま受け止めれば、「野生化したノネコの捕獲」と「アマミノクロウサギの指定生息数の増減」との関係性は薄いか、見方によってはほとんど認められないと言えるのではないだろうか。

今回の記事にある環境省奄美群島国立公園管理事務所の阿部氏のコメントの「捨て猫などが野生化したノネコの捕獲が進んだ効果も大きい」の部分は、よくわからない。「生きた化石」とも称されるアマミノクロウサギの生息数が大きく回復しているのはたいへん喜ばしいことだ。

環境省は、レッドリストで「絶滅危惧ⅠB(近い将来に絶滅の危険性が高い種)」に分類されているアマミノクロウサギを「絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が増大している種)」以下にすることを目指している。そのために多額の税金も投じられている。

環境省には、掲げた目標を達成するためにはどの道を進むのがただしいのか、または効果があるのか、データに真摯に向き合い、多方面からの意見に耳を傾けて、適切な検討を行ってほしいと思う。